母なれど、アウシュビッツの元看守の母は許せず

「黙って行かせて」の書評が目に留まりと読んだ。

著者（小説家）が４才の時、父と弟を捨て元ナチス親衛隊員になり、アウシュビッツ収容所の元看守であり、老人ホームで暮らす母を２７年ぶりに訪ねて、歴史の真実を聞き出そうとした２時間の対話記録である。

その前に一度、見捨てられてから３０年後、母が他国で生きていることを初めて知り訪ねている。その時、恐らく収容者から搾取したのであろう金製品の飾り等を「いつか必要になるだろうから」と差し出す母に、殺戮の加害者の娘である事実を否応なく実感し、「こんな母はいらない」と思い別れる。母は母で、その時から強い罪悪感に襲われたのであろうか、以後家族のことを記憶の彼方に追いやるという形でしか生きられなくなったよう。現に、２７年ぶりの再会に来た娘に、最初は「自分の娘は、もう死んでいない」という。

娘は、母を許すべく、また、自分の母が歴史的罪悪に荷担していたという心の束縛から解放されたく、母から悔恨の情の言葉を聞き出そうと時に糾弾もするが、母の口をついて出る言葉は、看守時代の人体実験でも忠実に任務を遂行したというような自慢話ばかり。

ついに、母と娘は、話の交わりのない歪みのまま別れる。後年著者が匿名で老人ホームに問い合わせたところ、「その方は、亡くなりました」と告げられたという。娘の心は、もう永遠に解放されることはないであろう。

アウシュビッツ収容所等の惨劇は、我々が知る歴史的事実であり、被害者側からの報告は目にしているが、加害者側の人間としての姿がかいま見えるかなと購読したが、母親の呟く「戦争は人間を変える」という一言が何ともやるせなく聞こえる。

歴史的記述の事実とは別に、加害者であれ、被害者であれ、それに翻弄されてなお生き続けなくてはならない人間の姿こそ、歴史の真実ということではないだろうか。本のような母と娘のほどかれない心の歪みこそ、歴史の実話であろうとも思う。

こうした哀しい実話から、我々は何を学べばいいのだろうか……。

（2005 年 2 月 12 日　記）